

世界に売られた男がめぐりあう、  
世界を売られた女。

“outlandos d'amour”

# アウトランドスの戀

上遠野浩平

Illustration / ウエダハジメ

上遠野浩平、そしてウエダハジメが浮き彫りにする、  
背中合わせの“戀”のはじまり——

outlandos【あうらんどうす】

僻地、遠隔の地、異国の意。言葉としては古体。特定のどこかではなく、遠く離れた場所を曖昧に表す単語である。

1.

「あなたの、覚えている最初の記憶はなんですか？ 生まれたときの記憶があるとか？」

その女は古狛邦夫に向かつてそう訊いてきた。それに対して邦夫は、

「そうですね、赤いです」

ためらいなく答える。これはいつものことだった。

「赤い？」

「ええ」

「それは何が赤いのですか」

「何もかもです」

「周囲の色々なものが、ということですか」

「ええ。そして自分の手も、赤い——」

「手が赤い？ 赤ん坊なのに、自分の手が認識できたのですか？」

「おそらく、そのときは自分の手だとは思っていなかったでしょうね。真っ赤に染まった紅葉のようなものが見えて、それは後から考えたら自分の手だったのでないか、と思った——そんなところでしょう」

「とにかく印象としては、赤いど——それは要は」

女はその言葉をためらいなく、続けて言った。

「血の色ですか？ あなたは血塗れになっている自分で、そして周辺を見たど」

「おそらくはそうです。赤さには黒ずんだところがありましたから」

「母親の胎内から生まれ出た、そのときの記憶なのですか。それなら血塗れなのも当然ですが」

「そうではないと思います。特に、闇から出てきたとい

うような印象もありませんし、何より母親のことは私には何の記憶もないんですよ」

邦夫は肩をすくめて見せた。

「自分がどうやって生まれたのかも知らない。それに生まれた直後の赤ん坊は眼がほとんど見えないのではないですか。たしか脳が視覚情報を受け取れる状態になるまでは多少時間がかかるのか——」

「ああ、自分でも検討されたのですね。まあ、そうでしょうね——はつきりと視覚認識ができるようになるには多少の時間が必要でしょうね。そしてそれだけの時間があったら、母親から血と共に生み出されて放つたらかしくなっていたとしても、見えるときには——そんなものは乾ききっている。赤くはなく、茶色のはずだし。それにそんなにも周り中のすべてが真っ赤になっているはずもない——」

女はしみじみどうなずいた。

「これはちよつと、乱暴な仮定として言ってみるのですけど、それは単に赤い内装の部屋のことではないです

「淡々としている、と」

「そうです」

「それで、それは“どこ”の話ですか？」

「わかりません」

「土地の記憶はない？ その印象は？」

「遠いところです」

「どのくらい遠いのですか」

「とにかく遠いのです——ここではないどこかです」

「ここ、というのはこのビルのことですか。それともこの市？」

「いや——そういうのではなく、とにかく漠然と、ここではないのです」

「外国ですか？」

「かも知れませんが、私が何度かよその国に行ったときの印象でも、“ここではない”というような気がしました。空気が——いや気配というのか——とにかく、何かが違うのです」

邦夫の顔には、ここでやつと少し乱れが表れた。

か？」

「ああ、かも知れませんが。血の色で塗りたくられた部屋にいたときのイメージかも」

「ああ、どくに強<sup>まうごうてい</sup>迫的に“血”ということに固執はしないのですね」

「ええ。単なる記憶ですから。ただ臭いもあつたような気もするので、血ではないかと思うのです。自分も濡れていたし——そこに、一人きりで置かれていた」

「血の池地獄のようなところに、赤ん坊の頃に置き去りにされたのですか？ どういう状況なのでしょうね」

「さあ——精神分析だったら、面白い結果が出るのかも知れないですね。その場合は歪曲された印象ということになりそうですが」

「その可能性は否定しないのですね」

「そうです。事実であろうがなかるうが、正直どうでもいいのですよ。気味が悪いとか、心の奥底に染みついた忌まわしい記憶という感じでもなし——」

「……………」

女——雨宮世津子はその乱れを見て、すこしだけ眼を細めた。それは彼女が“標的”を見定めるとききの眼差しと同じだった。彼女の仕事は殺し屋だった。

しかし、今のところ彼女は別にこの古瀬邦夫を殺す気はない。彼女がこの男に会いに来たのはまったく別の理由だった。

「もしかすると、その気配が違うということが、あなたの独特の“才能”に関係しているのかも知れませんね」

彼女が言うど、邦夫は、え、と顔を上げた。

「どういうことですか？」

「あなたの不思議な才能は、我々のシステム内でも疑問視されてきたわけですが——どうも、そのヒントらしきものがわかってきました。私の、別の任務の方で出てきたあるものは、“ここではない”別の世界があるというようなことを言っていて——そしてそこではどうも“魔法”というものが実在しているらしい。そのエネルギーを利用して、様々なことができるのだと」

「……え？」

「そう、あなたが『自分の能力は自分固有のものではなく、技術である』と言っているのよ、これは極めて近い——そう思いませんか？」

「……………」

いきなり言われて、邦夫は茫然としていた。そこに雨宮は言葉を被せる。

「あなたはもしかすると、『そこ』から『ここ』にやってきた人間なのかも知れない。あなたが『ここ』で使うことのできるその奇妙な才能、私たちが『アウトランドス・ダムール』と呼んでいるそれは、実は『あっち』では誰でも使うことのできる『魔法』という技術のことなのかも知れない——」

そう言われても、邦夫としては反応に困る。なんだかひどく現実感に欠けることを言われているような、しかし妙に納得するものがあるような、そんな変な感覚があった。

「……ええと」

直接その、なにかできるというわけではないんですが。あなたがどういう説明を受けているのか知りませんが」

「ああ——」

雨宮はうなずいた。

「他人が無自覚に創り出したものを、本人も気づかない『割れ目』でしただけ——それを感じ取れるんですよ。じゃあ、たとえば」

雨宮は彼らがラウンジで話している、そのビルのエントランスホール全体を示すように手を広げた。

「ここにそれがあつたりしませんか？ 誰かにその『割れ目』どやらがくつついたりはしていませんか。視えますか」

「ええと——別に視えるとかそういうんではなくて、ですわね——」

困惑しながらも、邦夫は彼女が示している周囲を見回した。

すると——その途中で、びたり、と動きが急に、不自然に停まった。

とまどいつつも、彼は考えをまとめようとする。

「それは——その、つまり私の才能というのは、大した価値のないありふれたものである、ということですか」

邦夫が言うと、雨宮は首を横に振った。

「いいえ——そうではない。その逆です」

「え——」

「もしあなたの才能が、理論で説明が付き、無数の応用が利き、かつ誰でも使えるエネルギーに基づいているのならば——あなたは世界を根本から変えることができるでしょう。あなたはもしかすると、この世に存在しているあらゆる者よりも重要な鍵を握っているのかも知れない」

雨宮の口調は淡々としていて、そこにはハタタリめいた響きも、煽り立てて反応を見るための誇張もなさそうだった。

「はあ——そうなんでしょうか」

邦夫としては答えようがない。

「しかし、使うことができると言いますけど、別に私が

「……………」

茫然自失、というような顔をしている。

その彼の不審な様子に、雨宮は少し眉をひそめた。

「どうかしましたか？」

邦夫は、その視線はある方向に向けられたまま、微動だにしない。

その先には、一人の若い女性がいた。どこかの会社の事務員らしく着ているものはスーツだが、童顔なのでまだ十代かも知れない。黒髪を中途半端な長さにして、その少し垢抜けない感じの娘は、彼にまじまじと見つめられて、その視線に気づいているので、向こうは強張っている。

それが無理もないほどに、邦夫の顔つきはただ事ではなかった。

「なんです？ あの女の子が何か？」

雨宮が訊いても、彼は答ええない。雷に打たれたような表情をしたまま、彼はふらつ、と立ち上がった。

そしてそのまま、その大して特徴のなさそうな娘の方

に近づいていく。

「ちよっと——」

ど雨宮が声を掛けたが、それも耳に入らないようで、彼はその平凡な娘の前にふらふらと、引き寄せられるように歩いていった。

そして、一言——掠れ声で言った。

「あ、あの——あなたのお名前は？」

言われた娘はひきつっていた。しどろもどろに、

「え、えと、あの、その——」

ど困惑している。その彼女に向かって、彼の方も、

「い、いや私は決してその、怪しい者どか、いやその、

なんて言うんでしようか——」

ど、さっぱり要領を得ない。

これは、こんな奇妙な状況の中でさえなかったら、ごくありふれた光景だっただろう。たまたま居合わせただけの女の子に、その娘を一目見ただけの男が声を掛けた

——そう、それはよくある状況である。

古狷邦夫はその娘に一目惚れしたのだった。

ついでにそれは、晩稲の彼にとつて、二十六年の人生で初めての恋だった。

\*

古狷邦夫は最初、土の中で埋もれているところを発見された。死んでいたわけではない。まだ生後一年ぐらいしか経っていない幼児だったのに、それが土の中に埋まっていたのに、死んでいなかった。それどころか発見されたときには極めて健康体だった。

発見されたのは工事現場だった。シャベルカーが乱雑に地面をほじくり返していたときに、急にその機械が停止したのである。

「電気が一瞬、びりつ、と走ったみたいだった。バッテリーから漏電でもしたのかも知れない」

どその機械を操作していた者は後に語ったが、しかしその停止が一つの生命を救った。シャベルはまさに埋もれていた赤ん坊ギリギリのところで停まっております、表に

